

長命寺の沿革（詳細）

一、『新編会津風土記』に見る長命寺

無量寿山長命寺は、慶長(けいちょう)十年(1605)、本願寺第十二世の教如上人(きょうによしょうにん)の創建による。会津藩の『家世実紀(かせいじつき)』や『新編会津風土記』に、長命寺は御門跡(ごもんぜき)や掛所(かけしょ)、別院とあり、由緒ある寺院である。境内には、三方を掘りと土塀が廻らされ、北側は築山(つきやま)が三っ連なる大庭園があった。

五本の白い水平線が引かれた土塀(どべい)(筋塀(すじべい))には、戊辰戦争の爪痕である無数の弾痕が残っており、昭和五年九月十六日に会津若松市指定文化財の認定を受けた。

江戸後期の文化(ぶんか)六年(1809)に完成した『新編会津風土記』によると、長命寺は江戸築地・浅草の両坊と同じ掛所(別院)と呼ばれている。教如上人が蒲生秀行(がもうひでゆき)に願い出て甲賀町に寺院を建て、別院を統括する役職である輪番(りんばん)を定めた。初めは三河国から祐金という僧が輪番として長命寺の住職となる。その後しばらくは、諸国の僧が輪番を務めた。

かねてから寺地(てらち)が狭いから移転を願い出ていたが、寛文年間の時、西名子屋町に東西一町(いちちょう)十間(けん)、南北四十間の地を与えられた。境内には総門・中門(ちゅうもん)・本堂・鐘楼(しょうろう)があり、中門は四間に一間半。本堂は十間に八間。鐘楼は本堂の南にあり、鐘には延宝八年初冬十五日植木吉兵衛重嗣が寄附し、当山第八世幸胤とある。総門については建物の大きさが書かれておらず礎石のみと考えられる。総門の東向北に番所があつて、その前に高さ七尺(約2.1メートル)の石柱を建て、本願寺御門跡掛所と刻まれていた。

二、長命寺の創建について

地方の寺院で五本線の入った筋塀は誠に珍しく、本来は御門跡や掛所(別院)などの格式がある寺に見られるものである。長命寺の場合は、教如上人・蒲生秀行・徳川家康の関係から物事を見ると、新たなことが判明してくる。

徳川家康は西本願寺の勢力が全国的にも大きくなるのを危惧して、教如上人に現在の京都七条烏丸(からすま)に寺地(てらち)を寄進したのが慶長七年(1602)のこ

とである。さらに西本願寺の勢力と同等になることを考え、本願寺派の門徒を東西に二分させ、東西両本願寺を成立させた。

長命寺の創建は、教如上人が京都に地所を与えられた慶長十年から3年目のことであり、この時の会津藩主は会津宰相(さいしょう)蒲生氏郷(うじさと)の子・蒲生秀行であったが、まだ23歳の若さであり、御門跡・掛所といった格式のある長命寺の創建は無理であり、命令を出すことが出来たのは、徳川家康ただ一人と考えられる。

徳川家康と会津との関係は、慶長元年(1596)に家康の三女・振姫(ふりひめ)が会津の蒲生秀行に輿入れしたことである。慶長十七年(1612)蒲生秀行が亡くなると、振姫は深く信仰していた石塚観音の殿堂を、極めて荘厳(そうごん)な建物として再建した。徳川家康による影響が東本願寺の地方勢力の拡大にも及ぼしているならば、京都に寺地が寄進された三年後に、御門跡掛所と称される長命寺の創建は、家康と姻戚(いんせき)関係の会津ならば納得できるし、再建された石塚観音堂よりも、さらに荘厳な寺院であった可能性がある。

三、家世実紀に見る長命寺

長命寺が甲賀町に創建された以後の事や、西名子屋町に移る際の経緯については、寛永(かんえい)八年(1631)から文化三年(1806)までの間に、藩の記録として書かれた『家世実紀』に詳細に記載されている。

『家世実紀』によると、「松平下野守(しもつけのかみ)忠郷(たださと)(蒲生忠郷)の時代には、長命寺にたびたび材木が下賜(かし)された」とあり、修理の為か火災による再建なのか、藩より度々材木を賜っていた。

さらに、保科正之時代の寛文五年(1665)9月27日にも、甲賀町長命寺は藩より建築工事の材木を賜っている。『家世実紀』によると、「長命寺は本願寺御門跡宿坊にて……(略)……、近年、大破損をした為、修理出来ず、江戸に登って御門跡に報告すると、奥州半国の白河・棚倉・磐城(いわき)・仙台・白石・福島・二本松それに会津の八か所を廻って、門徒から寄附を集めて修理しなさいと話があり、御門跡からは使僧一人と住職が八か所を廻り三十両集め、松材は藩より456本を賜り大がかりな修復がなされた」とある。

さらに長命寺が、甲賀町から西名子屋町に移った際の経緯については『家世実紀』の寛文七年(1667)の巻に、寛文七年閏(うるう)二月二十九日、浄土真宗長命寺に西名子屋町に新しい地所を与えられた。甲賀町の町はずれの商家の多い地区で

は狭く、大窪山(おおくぼやま)あたりの四十間四方の所に移築してはと内々の話があったが、一向宗では門徒による朝夕二回の寺でのお勤めがあり、大窪山は遠いから無理だと訴え、現在の寺地は町中なので火事などの心配があったが、長命寺は東の御門跡の格式なので、願いの通り西名子屋町の町はずれに東西七十間、南北四～五十間の地所が在り、広く良い地所だからと賜った。これまでの甲賀町の寺地もこのまま長命寺の所有でよいとして、町屋にしてはどうかとの命令がなされた。

四、戊辰後の長命寺

戊辰戦争前の資料を基に明治の初めに書かれた『戊辰若松城下明細図』によると、長命寺の寺所は北側の正蓮寺・大運寺の前までとなっており、大きな規模で描かれている。これは藩命により甲賀町に所有している地所と交換した分が増えたということかも知れない。

明治四十三年に着手して昭和十六年に刊行された『若松市史』は、どの時代の資料をもとに書かれたのか判然としないが、長命寺の境内(寺地)は1750坪、境外(けいがい)所有地(寺の敷地)は、宅地が九畝(せ)五歩(ぶ)、寺地が三畝十五歩、畑が六畝十三歩とあり、これら全てが長命寺の地所と書かれ、末寺は四ヶ寺があったとなっている。「一畝(ひとせ)」とは30坪、一歩(いちぶ)とは一坪のことであるから、境内境外を合わせると2323坪の計算となる。

前段で述べた『新編会津風土記』に書かれていた境内の大きさは、東西一町十間、南北四十間となっていたが、一町とは3000坪(約9918平方メートル)、十間とは約18メートル18センチ。四十間とは約72メートル72センチであるから、『若松市史』にある長命寺の地所はやや狭くなっている。

これが現在の規模になったのは明治期か大正期なのか判然としない。昭和28年に若松市立日新小学校が創立する際、通学路の一部として寺地を提供している。

この長命寺は戊辰の戦いで、市街戦では最も壮絶な激戦の地となり建物が焼失し、若松城の御座所が本堂として移築されたが、火災により焼失してしまった。戦後は阿弥陀寺と共に会津藩の戦死者の埋葬地とされ、145名の遺骨が運び込まれ三つの土饅頭の墓が築かれ、そして現在の墓になり、毎年4月23日と9月23日には慰霊祭が執り行われている。

この文章は、

会津若松市文化財保護審議会委員

公益財団法人 日本美術刀剣保存協会会津支部長 渡邊 明 氏より、寄稿いただきました。